

医療小説に新しい風を吹き込む

——— 今、注目の作家 南杏子

図書館係 阿部健治

医師で作家という、森鷗外をはじめとして実に数多くの例があるが、医療の世界を描いたものと限定しても、久坂部羊や夏川草介、ミステリなら海堂尊や知念実希人など相当に数が多い。テレビドラマでは『コウノドリ』や『医龍』など、刑事物と双璧をなすような題材だから、私たちはこうしたものを通して、医療現場には相当に馴染んでいる（筆者はかつて人が注射されている映像を見るのもいやだったが、最近では心臓手術の現場などを見せられても何も感じなくなった。「慣れ」というのはすばらしいものだ）。

このように、小説としても、既に書き古された感さえある医療の世界だが、南杏子の作品に触れると「なるほど、本当はそうだよなあ。」と思わせられる場面が実に多く、「病」や「老い」という人間の業（ごう）とそれに関わる「医療」という世界の奥深さには改めて驚かされる。医療の現場には、建て前だけでは収めきれない「人間のホント」が否が応でも顔を出す。南杏子の目はそこにまっすぐに注がれているのだ。

まず、紹介したいのはごく最近刊行された『ヴァイタル・サイン』という作品である。この作品は一口に言えば、「看護師の日常」をくまなく描いたもの、ということになる。そのどこが新しいの？と言われそうだが、「活躍する看護師」ならドラマでも何度も見てきたが、「看護師という仕事の過酷さ」をここまでリアルに描いたものは今までになかった（少なくとも筆者の目には触れなかった）。本校には看護師を志望する生徒が数多くいるが、こんな過酷な仕事、本当にやっていけるのだろうか、本書を読んで筆者は心の底から心配になった（医療系を志望する人は是非この本を読んでみて下さい）。

ではどんなところが大変なのか。次に掲げてみよう。

看護師には、まず患者のヴァイタル・サイン（脈拍・血圧・体温・呼吸数・意識状態）を一定時間ごとに記録するという「柱」となる仕事がある（これが題名の由来だ）。しかし、その他に医師からの指示による仕事（薬品の準備や投与＝注射・点滴など。患者の家族への一次的対応、クレーム処理などもある。）、食事・トイレ・入浴の介助（必要としない患者もいるが、入院患者は高齢の人が多く必要な人が多い。これが本当に大変。）やナースコールへの対応、死者が出れば遺体をきれいに整える作業（これを「エンゼルケア」という。作中の病院は死亡退院が7割という設定だ。）等がある。時としてこれらがいつべんにやってくる。そういう時の病院はまさに戦場である。

加えて、この病院（「二子玉川グレース病院」という名前だ。）は日勤（午前9時～午後5時、実際には1時間半前の出勤は不文律、更に午後8時くらいまでの残業は当たり前ということらしい。）、準夜勤（午後5時～午前1時）、深夜勤（午前1時～午前9時）の3交代制で、毎日入れ替わる。例えば主人公のある月の最初の1週間のシフトは「日勤ー深夜勤ー準夜勤ー休みー日勤ー深夜勤ー休み」である。一応週休2日ではあるが、これでは毎日の生活リズムは確立しようがない。こういう過酷な勤務だと急に辞める人も少なくないので、そうなるとすぐには補充できなくてシフトは更に厳しくなるというオマケつきだ。

どうだろう。やっていける自信はあるだろうか。

入院患者は高齢者が多いので、入浴の介助は大変で、嫌がった患者にものを投げつけられ顔に傷を負うという場面もある。入浴させるときは1人25分で補助員と2人がかりで5人くらい続けて入れるらしいが、3時間くらいかかり切りで、汗びっしょりになるという。そうした大変な業務の中で、特に筆者の印象に残っ

た場面が二つあるので以下に紹介しよう。

一つはトイレの介助の場面だ。その患者さんは行動が不自由なので、車椅子に乗せるのも大変だが、トイレに連れて行き脱がせるのも大変、そしてようやく便座に座らせても、排便はすぐ済むわけでもない。そういうときにナースコールが鳴るのだ。他の看護師たちに声をかけるが、それぞれ別の患者にかかっており動けない。ナースコールへの対応が遅いというクレームを受けたばかりだったので、仕方なくトイレの患者さんに「そのまま待っていて」と声を掛けてナースコールのあった病室に向かうが、その間に、自分でパンツを履こうとした患者さん（看護師に迷惑掛けまいと頑張ったのだ。）は転倒して頭をぶつけてしまう…。主人公は上司に大目玉をくらうことになるのだ。

もう一つは患者の家族からのクレームだ。ある高齢の患者が誤嚥（食物などが気管に入ってしまうこと。高齢者はこれで亡くなることが多い。）して、その時は回復したのだが、患者の娘が、医学書のようなものを見せ、ここに「口腔ケア（口の中をきれいしておくこと）をしっかりと行っていれば誤嚥は起こらない」と書いてある。父が誤嚥したのは担当看護師がそれを怠ったからだ、今度そうになったら訴える、というのである。

口の中がきれいになっている方が誤嚥がおこりにくいのは真実なのだろう。しかし、どれほどきれいにしても運動機能が衰えている患者が絶対誤嚥しないということがあるだろうか。一生懸命やっているのにこう言われるつらさ、読んでいる方も胸が痛くなった。

この小説、最後には看護師の過酷な労働を解決する糸口が記されていて、ある意味ハッピーエンドに終わるのだが、筆者の胸には簡単には消えない重苦しさ（コロナ流行時、医療従事者が受けた差別や中傷なども思い出した。）が残った。

作者の南杏子は日本女子大学の家政学部被服学科を卒業し、（畑違いの）雑誌編集の仕事に就いたが、25歳で新聞記者の夫と結婚、海外勤務の夫についてイギリスに行き海外での出産を経験した。その後、その子が2歳、本人が33歳の時に一念発起して東海大学の医学部に学士編入、医師となった（勉強は本当に大変だったと思う。）。その後、スイスに行って医療も行ったが、帰国後は東京都内の終末期医療専門病院に内科医として勤務しているということだ。

小説を書くようになったのは、夫と一緒に通い始めた小説教室がきっかけであつたらしい。大学時代に寝たきりの祖父を家で看取った介護体験や医師として多くの死を見届けた経験をもとにして、終末期医療や在宅医療を題材とし、そこにミステリーの味付けをしたデビュー作『サイレント・ブレス』（2016）が出版され、これがかなり評判になった。第2作『ディア・ペイシェント』（2016・（「親愛なる患者さま」の意）はある患者が若い女医のストーカーになる、という意外な設定で、筆者の好きなBS-NHK日曜ドラマ枠でドラマ化された。筆者が南杏子を注目するようになったのは、このドラマを見たからで、ステータスも高く、世間からは羨ましがられる医師という職業にも実は様々なしごきがあるということ的印象的に描き出した秀作であった。

そして、主演に吉永小百合を迎えるということで大きな話題になった映画『いのちの停車場』（2021・5月に公開）の原作（題名は映画と同じ）が今のところ、南杏子の最高の作品と言えるだろうか。東京の大病院の救急救命センターの副院長をしていた60代の女医が故郷の金沢に帰ってきて在宅医療を行うという話である。救急救命医療というのは高度な専門性と意欲と経験が必要な分野で、ドラマ等では「天才外科医もの」と並ぶ医療ドラマの定番だが（かつて、「ER」というロングランのドラマがあった）、実は在宅医も「年を取ったものの片手間仕事」などでは全くなく、救急救命医に匹敵するか、あるいはそれ以上の能力（柔軟性や我慢強いことなど、人間的なものも含めて）が必要とされる分野だということ、強く強く訴えている。

「患者さんのホント」は病室の中にあるのではなく、生活の拠点である家でこそ、家族たちに囲まれてこそ現れるものだ。考えれば当たり前だが、目の当たりにして初めてわかることなのだ。そして南杏子のそれは本当にわかりやすい。彼女の経験と筆力が私たちにとってこの上なく貴重なものだとする所以である。